

詩篇 15:10 における *cum vultu tuo* の 古英語訳について

石 原 覚

I

以下は神の傍らにある歓喜を述べたローマ詩篇 (Psalterium Romanum (PsRom)) の一節である。ここでは *cum vultu tuo* (あなたの顔と共に) という表現が見出される。

- (1) *notas mihi fecisti vias vitae adimplebis me laetitia cum uultu tuo delectationes in dextera tua usque in finem.* (PsRom 15:10)¹⁾

(あなたは命の道を私に知らせた。あなたは、あなたの顔と共に[ある]私を喜びで満たすであろう。心地良さがあなたの右手に最後まで。)

- (2) は (1) に対応する古英語散文訳詩篇 (PPs (prose)) の箇所であるが、注目を引くのは (1) の *cum vultu tuo* が *beforan þinre ansyne* (あなたの面前で) により訳されていることである。²⁾

- (2) *Þu me gedydest lifes weg as cuðe, and gefylst me mid gefean beforan þinre ansyne; for ælc riht lustbærnes cymð þurh þinne fultum, þæm þe heo cimð on ecnesse.* (PPs (prose) 15.11)³⁾

(あなたは命の道を私に知らせ、あなたの面前で私を喜びで満たす。あらゆるふさわしい悦楽は、それが永遠に到来する者のために、あなたの助けによって到来するからである。)

R. Weber のテキストの索引 (Index uerborum) によれば、PsRom における *cum vultus ...* (…の顔と共に) の用例は、(1) に加えて以下の 2 例であり、いずれも (1) と同様、神について用いられた *cum vultu tuo* の形で現れる。

- (3) *quoniam dabis eum in benedictionem in saeculum saeculi laetificabis eum in gaudio cum uultu tuo* (PsRom 20:7)

(あなたは永遠に彼を祝福するであろうから。あなたは、あなたの顔と共に [ある] 彼を歓喜で喜ばせるであろう。)

- (4) *uerumtamen iusti confitebuntur nomini tuo et habitabunt recti cum uultu tuo*

(PsRom 139:14)

(しかし義人たちはあなたの名を賛美し、そして直き者たちはあなたの顔と共に住まうであろう。)

PPs (prose) では、詩篇20の冒頭以外と51以降が欠けているため、(3)(4)の訳は存在しない。

ウルガータ (Vulgata) の詩篇、すなわちガリア詩篇 (Psalteirum Gallicanum (PsGall)) における (1)(3)(4) の対応箇所では、以下の通り (1) の *delectationes* が *delectatio* となっている、(3) の *benedictionem* に先立つ *in* がない、(4) の *habitabunt* に先立つ *et* がない、ことを除けば異同はない。

(5) *notas mihi fecisti vias vitae adimplebis me laetitia cum vultu tuo delectatio in dextera tua usque in finem.* (PsGall 15:10)⁴⁾

(あなたは命の道を私に知らせた。あなたは、あなたの顔と共に[ある]私を喜びで満たすであろう。心地良さがあなたの右手に最後まで。)

(6) *quoniam dabis eum benedictionem in saeculum saeculi laetificabis eum in gaudio cum vultu tuo* (PsGall 20:7)

(あなたは永遠に彼を祝福するであろうから。あなたは、あなたの顔と共に [ある] 彼を歓喜で喜ばせるであろう。)

(7) *verumtamen iusti confitebuntur nomini tuo habitabunt recti cum vultu tuo* (PsGall 139:14)

(しかし義人たちはあなたの名を賛美し、直き者たちはあなたの顔と共に住まうであろう。)

ところで、A~K の古英語の詩篇行間注解 (Psalter gloss)⁵⁾ における、(1)(5)、(3)(6)、(4)(7) に対応する箇所では、*cum vultu tuo* を訳すのに、*ansyn* の代わりに同じく「顔」を意味する *andwlita* がほぼ一貫して用いられている⁶⁾が、いずれの箇所においても以下のごとく、*cum* は正しく *mid* により訳されている。

(8) ... *ðu gefylles me blisse mid ondwléotan ðinum* ... (PsGIA 15.11)

(9) ... *ðu geblissas hine in gefian mid ondwléotan ðinum* (PsGIA 20.6)

(10) ... *& eardiað rehte mid ondwlitan ðinum* (PsGIA 139.13)

本稿では、(1) の *cum vultu tuo* の訳として (2) の *beforan þinre ansyne* がいかなる点で不適切かを明らかにしたい。

II

ウルガータの中で cum vultu ... という表現は (5)~(7) においてのみ見出される⁷⁾が、まず cum vultu tuo という表現がいかに解釈され得るかを確認したい。

Haymo (853 没)⁸⁾は問題の詩篇 15:10; 20:7; 139:14 の cum vultu tuo を、以下のごとく一貫して「あなたの面前に (で)」(in praesentia tua) と言い換えている。

... <adimplebis me lætitia> in assumptione: me dico positum <cum vultu tuo,> id est in praesentia tua: ...⁹⁾

(……保護の下に「あなたは私を喜びで満たすであろう」。私は自分が「あなたの顔と共に」、すなわちあなたの面前に、置かれていると言う。……)

... Et etiam <lætificabis eum in gaudio> quod sui habebunt <cum vultu tuo,> id est, in praesentia tua, scilicet, quando fruatur perfecta cognitione tui. ...¹⁰⁾

(……またさらに、彼の者たちが「あなたの顔と共に」、すなわちあなたの面前で、つまりあなたの完全なる認識を得る時、有するであろう「歓喜であなたは彼を喜ばせるであろう」。……)

... <et> ideo ipsi <recti habitabunt> æternaliter <cum vultu tuo,> id est in praesentia tua, videntes te facie ad faciem, et cognoscentes sicut et cogniti sunt.¹¹⁾

(……「そして」それ故に「直き者たちは」永遠に「あなたの顔と共に」すなわちあなたの面前で、面と向かってあなたを見ながら「住まうであろう」。彼らはこのように知り、また知られるのである。)

この in praesentia ... (…の面前で) という表現は、次の (11) におけるように、ある人が眼前の人に対して何ら恩恵を施さないような場面でも用いられる。

(11) Ipsa etiam prostibula, publicae libidinis hostiae, in scaena proferuntur, plus miserae in praesentia feminarum, quibus solis latebant, perque omnis aetatis, omnis dignitatis ora transducuntur; (TERT. spect. 17, 3)¹²⁾

(大衆の欲望の犠牲である娼婦たちも——それらからだけは身を隠していた女性たちの面前で余計に惨めに——舞台上で晒され、あらゆる年齢、あらゆる地位の注視する中を引き回される。)

ならば Haymo が記すように、「あなたの顔と共に」とは「あなたの面前に(で)」のことなのであろうか。

ここで注目すべきは、cum vultu tuo に見られる前置詞 cum が、以下の (12)～(15)—— Hieronymus (347/348–420) による詩篇20:7の解釈における例の (12)、古典期からの例の (13)、ウルガータの旧約からの例の (14)、同じく新約からの例の (15)——に見られるごとく、人が神（または神々、キリスト）と共にある恵まれた状態を指すのに用いられることである。

(12) *Laetificabis eum in gaudio cum vultu tuo. Hoc est: erit tecum semper in caelis.*¹³⁾

（「あなたは、あなたの顔と共に [ある] 彼を歓喜で喜ばせるであろう」。すなわち彼はあなたと共に常に天にいるであろう。）

(13) *certe sit nihil bonum aliud potius, si quidem vel di ipsi vel cum dis futuri sumus.* (Cic. Tusc. 1, 76)¹⁴⁾

（我々自身が神々になるか、または神々と共にあるとしたら、確かにそれに勝る善はないであろうに。）

(14) *principes populorum congregati sunt cum Deo Abraham quoniam Dei fortes terrae vehementer elevati sunt* (PsGall 46:10)¹⁵⁾

（もろもろの民の君主たちは、アブラハムの神と共に集まった。神の、地の強き者たちは大いに上げられたからである。）

(15) *coartor autem e duobus desiderium habens dissolvi et cum Christo esse multo magis melius* (Phil 1:23)¹⁶⁾

（すなわち私は2つのことに圧迫されている。はるかにより良いこととして、解き放たれてキリストと共にあるという願望を持っている。）

他方、(5)は TLL の cum の項において、以下の記述の下例示されているものの中に見出される。¹⁷⁾

de instrumento actionis: difficile est hanc partem separare ab antecedentibus. ubicumque enim is qui aliqua re instructus vel cum ea iunctus est, cum illa ipsa re agere quid dicitur, praepositioni cum subest significatio instrumenti: . . . in hac parte ea tantum collegi, in quibus notio instrumentalis praevalere mihi visa est . . .

（行為の道具について：この部分は前の部分と分けられにくい。あるものを備えた、またはそれと結び付いたものが、それと共に何かをなすと言われる場合、前置詞 cum には道具の意味が含まれるからである。

……この部分では道具の概念が強いと思われる例のみを集めた。
……)

つまり (5) の cum は道具・手段の意味で捉えられているのである。ちなみに今義博他による翻訳では詩篇 15:10 は「あなたはわたしを、御顔によって喜びで満たされるでしょう」¹⁸⁾(上点筆者) と訳されている。また (3)(6) は TLL の lactifico の項で cum により「原因が示される」(‘indicatur causa’) 例として挙げられている。¹⁹⁾ならば詩篇 15:10 と 20:7 の cum は、このように道具・手段や原因の意味で解されるべきであろうか。後に引用する Augustinus (430 没) による詩篇 139:14 の解釈において詩篇 15:10 が引き合いに出されていることから分かるように、これらの詩篇の箇所(更に 20:7 も含め)において cum vultu tuo は一貫した意味で解されるべきである。詩篇 139:14 の habitare (住む) に伴う cum を道具・手段や原因の意味で捉えることは不可能であり——TLL は (7) の habitare を「神との人間たちの交流について」(‘de hominum cum deo communicatione’) 用いられた例として挙げている²⁰⁾——、よって詩篇 139:14 の cum と同様に、15:10 と 20:7 のそれも同伴の意味で捉えるべきである。

次いで同じく注目すべきは、詩篇 15:10; 20:7; 139:14 における神の顔が、恩恵をもたらすものとして捉えられることである。このことは、以下に示す、これら 3 箇所のいずれかへの解釈において、神の顔に関連していかなる記述がなされているかを見れば明らかである。すなわち Augustinus が詩篇 139:14 を解釈した

... Ideo uide quid sequitur, uide quo concludit: *Inhabitabunt recti cum uultu tuo*. Male enim illis fuit in uultu suo; bene illis erit cum uultu tuo. Quando uultum suum amauerunt, in sudore uultus sui panem manducauerunt. Redeant, et deterse sudore, finitis laboribus, pereunte gemitu, ueniet illis facies tua abundans sufficientia. Nihil quaerent amplius, quia melius non habent; amplius non te deserent, nec deserentur a te. Etenim post resurrectionem de domino quid dictum est? *Adimplebis me laetitia cum uultu tuo*. Sine uultu suo non nobis daret laetitiam. Ad hoc purgamus uultum nostrum, ut gaudeamus ad uultum ipsius. ...²¹⁾

(……故に何が続くか、どこで [この詩篇が] 終わるか見よ：「直き者たちはあなたの顔と共に住まうであろう」。すなわち災いが彼らに、自分たちの顔について生じたが、幸いが彼らに、あなたの顔と共に生

じるであろう。彼らが自分たちの顔を愛した時、その顔に汗をかいてパンを食べた。彼らを元に戻らせよう。そうすれば汗は拭われ、労苦は止み、呻吟は絶え、あなたの溢れるほど満たす顔が彼らに至るであろう。彼らには、それに勝るものはないのだから、彼らは他に何も求めないであろうし、最早あなたを捨てることも、あなたから捨てられることもないであろう。何故なら復活の後、主については何が言われているか。「あなたは、あなたの顔と共に [ある] 私を喜びで満たすであろう」[詩篇15:10]。彼は、その顔なしに我々に喜びを与えるはずがない。彼の顔の前で歓喜できるように、更に我々の顔を清めよう。……)

における「幸いが彼らに、あなたの顔と共に生じるであろう」(‘bene illis erit cum uultu tuo’)、*「あなたの溢れるほど満たす顔」*(*facies tua abundans sufficientia*)、*「彼は、その顔なしに我々に喜びを与えるはずがない」*(‘Sine uultu suo non nobis daret laetitiam’)、Cassiodorus (583没) が詩篇15:10を解釈した

... Significat etiam iustos omnes in illa beatitudine laetitia uultus Domini esse complendos, ...²²⁾

(……また [この節は] すべての義人たちがその至福の状態であって主の顔の喜びで満たされるはずであることを示している。……)

における「主の顔の喜び」(*laetitia uultus Domini*)、20世紀の注解者 J. Niglutsch が詩篇20:7を解釈した

Sens.: facis eum obiectum seu exemplum benedictionis in aeternum, magno gaudio eum afficis ostendendo ei vultum tuum propitium. Verba haec verius ad Christum quam ad Davidem referuntur.²³⁾

(意味：あなたは彼を永遠に祝福の対象ないしは見本とし、彼にあなたの慈悲深い顔を見せて大きな喜びを与える。これらの言葉はダビデよりむしろキリストに関連付けられる。)

における「あなたの慈悲深い顔」(*vultus tuus propitius*)——といった記述は、詩篇15:10; 20:7; 139:14における神の顔が恵みをもたらすものであると解釈され得ることを示す。

従って「あなたの顔と共に」(*cum vultu tuo*) とは、人が神に伴われた恩恵ある状態を指すと言える。

III

ここで詩篇 15:10; 20:7; 139:14 のギリシャ語原文、すなわち七十人訳聖書 (LXX) における対応箇所 (16)~(18) に目を向けてみよう。問題の cum vultu tuo は (16)(17) の μετὰ τοῦ προσώπου σου (あなたの顔と共に)、(18) の σὺν τῷ προσώπῳ σου (あなたの顔と共に) に由来する。

(16) ἐγνώρισάς μοι ὁδοὺς ζωῆς· πληρώσεις με εὐφροσύνης μετὰ τοῦ προσώπου σου, . . . (Lxx Ps.15(16).11)²⁴⁾

(あなたは私に命の道を知らせた。あなたは、あなたの顔と共に[ある]私を喜びで満たすであろう。……)

(17) ὅτι δώσεις αὐτῷ εὐλογίαν εἰς αἰῶνα αἰῶνος, εὐφρανεῖς αὐτὸν ἐν χαρᾷ μετὰ τοῦ προσώπου σου. (Lxx Ps.20(21).7)

(あなたは彼に永遠に祝福を与えるであろうから。あなたは、あなたの顔と共に [ある] 彼を歓喜で喜ばせるであろう。)

(18) πλὴν δίκαιοι ἐξομολογήσονται τῷ ὀνόματί σου, καὶ κατοικήσουσιν εὐθεῖς σὺν τῷ προσώπῳ σου. (Lxx Ps.139(140).14)

(しかし義人たちはあなたの名を賛美し、そして直き者たちはあなたの顔と共に住まうであろう。)

上記の箇所の μετὰ τοῦ προσώπου σου と σὺν τῷ προσώπῳ σου は、いずれもヘブライ語原文の הַפְּנִיָּה־אֵל (あなたの顔と共に) に対応するが、(16)~(18) のヘブライ語原典における対応箇所である詩篇 16:10; 21:7; 140:14 は、BDB において「…の面前で」(‘in the presence of’) の意味の הַפְּנִיָּה־אֵל が神に対して用いられた הַפְּנִיָּה־אֵל の例として、「あなたの面前で」(‘in thy presence’) の意味と共に挙げられている。²⁵⁾ また詩篇 140:14 は、F. Zorell のヘブライ語辞典において「(ある人の) 顔あるいは臨在と共に」(‘cum facie seu praesentia alcs’) の意味の הַפְּנִיָּה־אֵל の例として「主のそばで」(‘apud Dm’) と記され挙げられている。²⁶⁾

これらのヘブライ語辞典に示された「あなたの面前で」「主のそばで」という意味は、各種ギリシャ語辞典——それぞれ C. L. W. Grimm²⁷⁾, F. Zorell²⁸⁾, Bauer-Aland²⁹⁾, T. Muraoka³⁰⁾ による——における (16) の (使徒行伝 2:28 に引用された) μετὰ τοῦ προσώπου σου ないしは (18) の σὺν τῷ προσώπῳ σου の解釈に認められる。

ちなみに πρόσωπον が μετά ないしは σὺν に支配される形は、LXX に

は上記(16)～(18)の3箇所には、また新約聖書においても使徒行伝2:28にはしか見出されない。³¹⁾

注目には値するのは、前置詞 *μετά* が、先に見た *cum* と同様、以下の(19)～(21)—— Euthymius Zigabenus (11-12世紀)による詩篇15:11の解釈における例の(19)、古典期の例の(20)、LXXの例の(21)——に見られるごとく、ある者が神に伴われた幸いな状態を指すのに用いられ得るということである。

(19) ... Εὐφρανεῖς οὖν με, φησὶ, τὸν προσληφθέντα ἄνθρωπον, μετὰ τοῦ προσλαβόντος Θεοῦ, μετὰ τὴν ἀνάστασιν. ... Ἡ καὶ μετὰ τοῦ προσώπου σου, ἀντὶ μετὰ σοῦ, περιφραστικῶς· ὁ μὲν γὰρ ἠνωμένος ἦν τῷ Υἱῷ, ὁ δὲ Υἱὸς, τῷ Πατρὶ, καὶ κοινήν ἔσχον τὴν εὐφροσύνην ἐπὶ τῇ σωτηρίᾳ τῶν ἀνθρώπων, ἦν ὁ διὰ σταυροῦ θάνατος εἰργάσατο.³²⁾

(……だからあなたは、受け入れられた人間である私を、受け入れる神と共に、復活の後、喜ばせるであろう、と言われている。……あるいはまた「あなたの顔と共に」とは迂言的に、あなたと共にということである。彼[神]は子と、子は父と一つであって、十字架の死がもたらした人間たちの救いの喜びを共有したからである。)

(20) ὃς μετ' Ἀθηναίης γλαυκώπιδος ἀγλαὰ ἔργα ἀνθρώπου εἰδίδαξεν ἐπὶ χθονός, οἱ τὸ πάρος περ ἄντροις ναιετάασκον ἐν οὐρεσιν ἢ τε θήρες. (*h.Hom.20.2*)³³⁾

(彼[ヘーパイストス]は、昔は野獣のごとく山中の洞穴で暮らしていた人間たちに、輝ける目のアテーナーと共に、見事な技を地上で伝授した。)

(21) κτηνώδης ἐγενόμην παρὰ σοί. καὶ ἐγὼ διὰ παντὸς μετὰ σοῦ, ἐκράτησας τῆς χειρὸς τῆς δεξιᾶς μου, ἐν τῇ βουλή σου ὠδήγησάς με καὶ μετὰ δόξης προσελάβου με. (*Lxx Ps.72(73).22-24*)³⁴⁾

(私はあなたの傍らで駄獣となった。しかし私は常にあなたと共に、あなたは我が右手を取り、あなたの意思において私を導き、栄光と共に私を受け入れた。)

同じことは前置詞 *σύν* についても当てはまる。すなわち以下の(22)～(24)—— Euthymius による詩篇139:14の解釈における例の(22)や、古典期の例の(23)、新約の例の(24)——に見られるごとく、*σύν* も神(またはキリスト)と共にある恵まれた状態について用いられ得る。

- (22) Εὐθεῖς, τοὺς δικαίους λέγει πάλιν, ὅτι κατοικήσουσι σὺν σοί ἤγουν, σὺν τῇ μνήμῃ σου, πάντοτε συνόντες αὐτῇ, καὶ οὐδέποτε ταύτης ἀφιστάμενοι. . . .³⁵⁾

(直き者たちとは、再び義人たちのことを言う。彼らはあなたと共に、すなわちあなたの記憶と共に住まうであろうから。常にそれと共にあり、決してそれから離れずに。……)

- (23) νῶϊ δ', ἐγὼ Σθένελός τε, μαχησόμεθ' εἰς ὃ κε τέκμωρ Ἰλίου εὐρωμεν σὺν γὰρ θεῶ εἰλήλουθμεν. (II.9.49)³⁶⁾

(私たち 2 人、私 [ディオメデース] とステネロスとは、イーリオスの行く末を見るまでは戦うでしょう。私たちは神と共に来たのですから。)

- (24) συνέχομαι δὲ ἐκ τῶν δύο, τὴν ἐπιθυμίαν ἔχων εἰς τὸ ἀναλύσαι καὶ σὺν Χριστῶ εἶναι, πολλῶ [γὰρ] μᾶλλον κρείσσον. (*Ep.Phil.1.23*)³⁷⁾

(すなわち私は 2 つのことに圧迫されている。はるかにより良いことなので、解放たれてキリストと共にあるという願望を持っている。)

続いて注目すべきは、Theodorus Mopsuestenus (350 頃 - 428) による詩篇 15:11 の解釈である

Ἀντὶ τοῦ ἐκ προσώπου σου, τουτέστιν ἐκ τῆς ἐπιφανείας σου καὶ τῆς παρὰ σου βοηθείας, πληροῦμαι εὐφροσύνης.³⁸⁾

(あなたの顔によって、ということである。すなわちあなたの顕現とあなたからの助けによって、私は喜びで満たされる。)

において、神の顔が「あなたからの助け」(ἢ παρὰ σου βοήθεια) と、また以下の Theodoretus Cyrrensis (393 頃 - 458 頃) による詩篇 20:7 の解釈において

Καὶ ἐν ἀπάσαις δὲ, φησὶ, ταῖς γενεαῖς ἀοίδιμος ἔσται, καὶ πολυθρύλλητος, τοσαύτην ἐσχηκῶς παρὰ σοὶ παρόρησιαν. Τὸ γὰρ, <μετὰ τοῦ προσώπου σου,> παρὰ τῷ προσώπῳ σου τέθεικεν ὁ Σύμμαχος. Εὐφροσύνην τοίνυν ἔξει, φησὶ, καὶ διηνεκὴ θυμηδία, τοῦ σοῦ προσώπου, τουτέστι, τῆς σῆς εὐμενείας τυγχάνων.³⁹⁾

(また、かくも大きな信頼をあなたのそばで得て、彼はすべての世代で名高く、有名になるであろうと言われている。確かにシュンマコス は「あなたの顔と共に」を「あなたの顔のそばで」と記した。それ故彼は、あなたの顔、すなわちあなたの好意を手に入れ、喜びと絶え間

のない歓喜を得るであろうとされている。)

神の顔が「あなたの好意」(ή σή εὐμένεια) と、言い換えられている事実である。このことは、これら詩篇の箇所における神の顔が、恩恵を与えるものと見なされ得ることを示す。

以上から、(16)~(18)における「あなたの顔と共に」(μετὰ τοῦ προσώπου σου ないし σὺν τῷ προσώπῳ σου) という表現が、人が神と共存する幸いな状態について用いられているとわかり、⁴⁰⁾ II で得た cum vultu tuo についての結論を補強することができる。

IV

ここで古英語訳に目を向けたい。(2)に見られる beforan / for ... ansyne(…の面前で (に、を)) という表現は、PPs (prose) の中で、神について用いられた場合、(2) 以外で、13 回現れる。以下の (25)~(37) がその 13 例である。このうち (25)~(29) において beforan ... ansyne と共に現れる、(25) の「我が道」(min weg)、(26)(28)(29) の「私」(ic)、(27) の「我が叫び」(min gehrop) は、神の恩恵が授けられる対象と捉えることもできる。

(25) Drihten, læd me on þine rihtwisnesse fram minra feonda willan; geriht minne weg beforan þinre ansyne; se weg ys min weorc. (PPs (prose) 5.8)

(主よ、我が敵たちの意図から、あなたの義において私を導き給え。我が道をあなたの面前で直くし給え。その道は我が行いである。)

(26) Ic þonne rihtwis me oðwe beforan þinre ansyne, and beo þonne gefylled ealles godes, þonne me byð (æteawed) ðin wuldor. (PPs (prose) 16.15)

(そして私は、義なる者としてあなたの面前に現れ、あなたの栄光が私に明らかになる時、あらゆる善で満たされる。)

(27) And he gehyrde of his þam halgan temple mine stemne, and min gehrop com beforan his ansyne, and eac on his earan hit eode. (PPs (prose) 17.6)

(彼は彼の聖なる神殿から我が声を聞き、我が叫びは彼の面前に至り、またそれは彼の耳に入った。)

(28) Þu me underfenge for minre unscæðfulnesse, and me gestrangodest beforan þinre ansyne on ecnesse. (PPs (prose) 40.12)

(あなたは私を我が無垢の故に引き受け、あなたの面前で永久に私を堅固にした。)

- (29) Mine sawle þyrst and lyst þæt heo mæge cuman to Gode, for þam he is se libbenda wylle; eala Dryhten, hwænne gewyrð þæt, þæt ic cume and ætýwe *beforan Godes ansyne?* (PPs (prose) 41.2)

(我が魂は渇き、神に至ることを欲する。彼が生きている泉であるからである。ああ主よ、いつ私は行って、神の面前に現れることになるのか。)

しかしながら、注意すべきことに、以下の (30)~(37) において *beforan* / *for* ... *ansyne* と共に現れる、(30) の「我が敵たち」(*mine fynd*)、(31)(36) の「火」(*fyr*)、(32) の「雲」(*þa wolcnu*)、(33) の「我が心の熟考」(*mines modes smeaug*)、(34) の「地に下るすべての者たち」(*ealle þa þe on eorðan astigað*)、(35) の「不義の者」(*se unrihtwisa*)、(37) の「お前たちの供え物」(*eowra offrunga*) は、神の恩恵が与えられる対象とは考えられない。

- (30) For ðam ðu gehwyrðdest mine fynd under bæc, and hi wæron geuntrumode and forwurdon *beforan ðinre ansyne*. (PPs (prose) 9.3)

(あなたが我が敵たちを後退させ、彼らは衰え、あなたの前で滅びたからである。)

- (31) For þam astah smec for his yrre, and fyr blysede *beforan his ansyne*. Gleda wæron onælde fram him; (PPs (prose) 17.8-9)

(それ故彼の怒りで煙が昇り、彼の面前で火が燃えた。それにより炭が熾された。)

- (32) And þa urnan swa swa <ligetu> *beforan his ansyne*; and he gemengde hagol and fyres gleda. (PPs (prose) 17.12)

([雲は] 彼の面前を稲光のように走り、彼は雹と燃えている炭を混ぜた。)

- (33) Gif ðu me þonne fram him alyst, þonne sprece ic þæt þe licað, and mines modes smeaug byð symle *beforan ðinre ansyne*. Drihten, þu eart min fultum and min alysend. (PPs (prose) 18.13-14)

(もしあなたが私を彼ら [我が敵たち] から救うのなら、私はあなたに喜ばれることを話し、我が心の熟考は常にあなたの面前にある。主よ、あなたは我が助け手にして我が解放者である。)

- (34) Hy etað, and hy gebiddað ealle þa welegan geond þas eorþan; *beforan his ansyne* cumað ealle þa þe on eorðan astigað. (PPs (prose) 21.27)

(彼らは食べ、彼らは拜む、この地上のすべての富める者たちは。地

に下るすべての者たちは彼の面前に来る。)

- (35) For þæm he deð swiðe facenlice *beforan his ansyne*; ac his unriht and his feoung wurd þeah swiðe open. (PPs (prose) 35.2)

(彼 [不義の者] は彼の面前で非常に欺瞞的に振る舞うからである。しかし彼の不義と彼の憎しみは大いに明らかとなる。)

- (36) And eft cymð se ylca God swiðe openlice, þæt ys ure God; and he þonne naht ne swugað. Fyr byrnð *for his ansyne*, and ymb hine utan strange stormas. (PPs (prose) 49.3-4)

(再び同じ神は、すなわち我らが神は、非常に明らかに来り、彼は何ら黙さない。火が彼の面前で燃え、彼の周囲では激しい嵐が。)

- (37) Ne þreage ic eow na æfter offrunga; for ðam eowra offrunga synt symle *beforan minre ansyne*. (PPs (prose) 49.9)

(私は供え物についてお前たちを責めない。お前たちの供え物は常に我が面前にあるからである。)

なお、以下の (38)(39) は *beforan ... ansyne* が、神に限らず人が面前の者・物に何ら恩恵を施さない場合にも用いられることを示すものである。

- (38) Se mid racenteagum gebunden wæs. & to þam halgum were & bisceope wæs gelæd. & *beforan his ansene* þearle wæs wedende. & fela unweorhlicra þinga wæs donde. (LS 13 (Machutus) 16r.5)⁴¹⁾

(彼 [悪魔に憑かれた子] は鎖に繋がれて、その聖人にして司教のもとへ連れて来られたが、彼の面前で荒れ狂い、多くの恥すべきことをした。)

- (39) Forðam mine eagan gesawon þine hæle. ða þu gearwodest *beforan ansyne eallra folca*; (Lk (WSCp) 2.30-31)⁴²⁾

(あなたがすべての民の面前に用意した、あなたの救いを、我が目が見たからである。)

さて、上記 (25)~(37) の13例の *beforan / for ... ansyne* のうち10例は、ラテン語原文の *in conspectu ...* (…の面前で (に、の)) に由来する。⁴³⁾以下の (40)~(49) がその10例である。

- (40) deduc me Domine in tua iustitia propter inimicos meos dirige *in conspectu tuo* uiam meam (PsRom 5:9)

(主よ、我が敵たち故に、あなたの義において私を導き給え。我が道をあなたの面前で直くし給え。)

- (41) ego autem cum iustitia apparebo in conspectu tuo satiabor dum manifestabitur gloria tua. (PsRom 16:15)
(しかし私は、義と共にあなたの面前に現れ、あなたの栄光が明らかになる時、満たされるであろう。)
- (42) et in tribulatione mea inuocaui Dominum et ad Deum meum clamaui et exaudiuit de templo sancto suo uocem meam et clamor meus in conspectu eius introiuit in aures eius (PsRom 17:7)
(我が苦難において私が主に呼びかけ、我が神に叫ぶと、その聖なる神殿から我が声を聞き、我が叫びは彼の面前で彼の耳に入った。)
- (43) prae fulgore in conspectu eius nubes transierunt grando et carbones ignis (PsRom 17:13)
(彼の面前の輝きの前を、雲、雹と燃えている炭が通り過ぎた。)
- (44) et erunt ut conplacent eloquia oris mei et meditatio cordis mei in conspectu tuo semper Domine adiutor meus et redemptor meus (PsRom 18:15)
(我が口の言葉と我が心の熟考は、あなたの面前で常に喜ばれるようなものとして、あるであろう。我が助け手にして我が解放者、主よ。)
- (45) manducauerunt et adorauerunt omnes diuites terrae in conspectu eius procident uniuersi qui descendunt in terram (PsRom 21:30)
(地のすべての富める者たちは食べて拝んだ。地に下るすべての者たちは彼の面前で平伏するであろう。)
- (46) quoniam dolose egit in conspectu eius ut inueniret iniquitatem suam et odium (PsRom 35:3)
([不義の者は] 彼の面前で欺瞞的に振る舞い、その結果自身の不法、そして憎しみを見出すであろうからである。)
- (47) propter innocentiam autem meam suscepisti me et confirmasti me in conspectu tuo in aeternum (PsRom 40:13)
(我が無垢の故にあなたは私を引き受け、あなたの面前で永遠に私を堅固にした。)
- (48) Deus manifestus ueniet Deus noster et non silebit ignis in conspectu eius ardebit et in circuitu eius tempestas ualida (PsRom 49:3)
(神は明白なものとして来り、我らが神は黙さないであろう。火が彼の面前で燃え、彼の周囲では激しい嵐が。)
- (49) non super sacrificia tua arguam te holocausta autem tua in conspectu meo

sunt semper (PsRom 49:8)

(私はお前の供え物についてお前を責めないであろう。お前の燔祭ほんさいは常に我が面前にある。)

古英語訳において見たごとく、このうち(40)の「我が道」(via mea)、(41)(47)の「私」(ego)、(42)の「我が叫び」(clamor meus)は、神の恩恵の受け手と考えることも可能であるが、(43)の「輝き」(fulgor)、(44)の「我が口の言葉と我が心の熟考」(eloquia oris mei et meditatio cordis mei)、(45)の「地に下るすべての者たち」(uniuersi qui descendunt in terram)、(46)の「不義の者」(iniustus)、(48)の「火」(ignis)、(49)の「お前の燔祭」(holocausta tua)は、そのように考えることは不可能である。

さらに in conspectu ... は、以下に挙げた古典期の例の(50)、ウルガータからの例の(51)におけるように、誰か(何か)が、神に限らずそれを前にしている人物から何ら恩恵を享受しない場合にも見出される。

(50) qui, ut erat in dicendo non solum sapiens sed etiam fortis, causa prope perorata ipse arripuit M^l. Aquilium constituitque in conspectu omnium, tunicamque eius a pectore abscidit, ut cicatrices populus Romanus iudicesque aspicerent aduerso corpore exceptas; (Cic. Verr. II 5, 3)⁴⁴

(彼は弁論において賢明であったばかりでなく力強くもあったので、陳述が終わりに近づいた時、自らマーイウス・アクイーリウスを掴み、皆が見ている前に立たせると、彼の下着を胸から引き裂き、体の前面に受けた傷痕をローマの人民と判事たちが見られるようにした。)

(51) et adpositus est in conspectu eius panis qui ait non comedam donec loquar sermones meos respondit ei loquere (Gn 24:33)

(パンが彼の面前に置かれたが、彼は「私の用件を話すまでは食べません」と言った。[ラバンは]「話さない」と答えた。)

この用法が in conspectu ... にあることは、その訳語となる beforan ... ansyne にも先に見たとおり、同じ用法があることを裏付けるものである。

詩篇 15:10 の cum vultu tuo は古英語散文訳詩篇で beforan þinre ansyne と訳されているが、前者は人が神に恵み深く伴われた状態について用いられているのに対し、beforan ... ansyne は人が自分に向き合っている人から何ら恩恵を受けない場合にも用いられるため、後者は前者の訳として適当ではないと結論できる。

注

- 1) R. Weber, *Le Psautier Romain et les autres anciens Psautiers latins*, Collectanea Biblica Latina 10 (Roma, 1953). 古英語のテキストの略記と引用の仕方は、原則として、*DOE (The Dictionary of Old English: A-H on CD-ROM (Toronto, 2017))* に従い、ラテン語のテキストのそれは、原則として、同辞典または *TLL (Thesaurus Linguae Latinae (Leipzig, 1900-))* に従う。なお、古英語およびラテン語の引用文中のイタリック体（ただし聖書からの引用であることを示すものは除く）、ギリシャ語の引用文中の下線は、すべて筆者によるものである。
- 2) P. P. O'Neill (King Alfred's Old English Prose Translation of the First Fifty Psalms (Cambridge, Mass., 2001), p. 193) は、(2) の 'beforan þinre ansyne' について 'Cf. He. *ante uultum tuum* (Ro. *cum uultu suo* [tuol])' と記して、その古英語表現と、ヘブライ語に基づいた詩篇 (Psalterium iuxta Hebraeos) 15:10: ostendes mihi semitam vitae plenitudinem laetitiarum ante vultum tuum decores in dextera tua aeternos (あなたは命の道を、あなたの面前の満ち足りた喜びを、あなたの右手の永遠の優美さを、私に示すであろう) における「あなたの面前の」 ('ante vultum tuum') との対応を指摘する。
- 3) J. W. Bright and R. L. Ramsay, *Liber Psalmorum: The West-Saxon Psalms, Being the Prose Portion, or the 'First Fifty,' of the So-Called Paris Psalter* (Boston, 1907).
- 4) R. Weber et al., *Biblia Sacra iuxta vulgatam versionem*, ed. quinta (Stuttgart, 2007).
- 5) それぞれのテキストは以下の通りである。A = The Vespasian Psalter, S. M. Kuhn (Ann Arbor, 1965); B = Der altenglische Junius-Psalter, E. Brenner, AF 23 (Heidelberg, 1908; Nachdr. Amsterdam, 1973); C = Der Cambridger Psalter, K. Wildhagen, Bib. ags. Prosa 7 (Hamburg, 1910; Nachdr. Darmstadt, 1964); D = Der altenglische Regius-Psalter, F. Roeder, Studien zur englischen Philologie 18 (Halle, 1904; Nachdr. Tübingen, 1973); E = Eadwine's Canterbury Psalter, F. Harsley, EETS 92 (London, 1889); F = The Stowe Psalter, A. C. Kimmens, (Toronto, 1979); G = The Vitellius Psalter, J. L. Rosier, (Ithaca, NY, 1962); H = The Tiberius Psalter, A. P. Campbell, Ottawa Mediaeval Texts and Studies 2 (Ottawa, 1974); I = Der Lambeth-Psalter, U. Lindelöf, Acta Societatis Scientiarum Fennicae 35, 1 (Helsingfors, 1909); J = Der altenglische Arundel-Psalter, G. Oess, AF 30 (Heidelberg, 1910; Nachdr. Amsterdam, 1968); K = The Salisbury Psalter, C. Sisam and K. Sisam, EETS 242 (London, 1959).
- 6) 詩篇 15:11 の vultus は、ansyn が用いられている K を除き、詩篇 20:7 の vultus は、ansyn と andwlita の二重注解が用いられている E と G、ansyn が用

- いられている J、それに注解が与えられていない K を除き、詩篇 139:14 のそれは、詩篇 114 以降を欠く H を除き、いずれも *andwita* のみに訳されている。
- 7) ウルガータの語句の検索には *Novae Concordantiae Bibliorum Sacrorum iuxta Vulgatam Versionem Critice Editam, quas digessit B. Fischer, 5 tom.* (Stuttgart-Bad Cannstatt, 1977) を使用した。
- 8) 本稿における生没年は R. Gryson, *Répertoire Général des Auteurs Ecclésiastiques Latins de l'Antiquité et du Haut Moyen Âge*, 2 vol. (Freiburg im Breisgau, 2007) または T. Wittstruck, *The Book of Psalms: An Annotated Bibliography*, vol. 1 (New York, 1994) による。
- 9) J.-P. Migne, 'Explanatio in omnes psalmos', *Haymonis Halberstatensis Episcopi Opera Omnia*, PL 116 (Turnholti), col. 240B-C.
- 10) Migne, PL 116, col. 261A-B.
- 11) Migne, PL 116, col. 669D.
- 12) E. Dekkers, 'De Spectaculis', *Quinti Septimi Florentis Tertulliani Opera*, CCSL 1 (Turnholti, 1954), p. 242. (11) は *TLL*, s.v. *praesentia* IB の「前置詞句 (副詞的、ないしはより動詞と緊密に結び付いた ; 誰が (何が) 存在するのかを示す属性辞が随所で付け加わる ; ……)」(‘locutiones praepositionales (sive adverbiales, sive artius cum verbo coniunctae; accedunt passim attributa indicantia quis [quid] praesens sit; …)’) の 1 において、*in praesentia* の形の例として挙げられている (vol. 10, pt. 2, p. 856, 57-58)。
- 13) G. Morin, 'Commentarioli in Psalmos', *S. Hieronymi Presbyteri Opera*, pars 1, 1, CCSL 72 (Turnholti, 1959), p. 197.
- 14) *Cicero: Tusculan Disputations*, with an English trans. by J. E. King, rev., LCL (Loeb Classical Library) 141 (1945), p. 88. (13) は *TLL*, s.v. 1. *cum* IA4 において「神 (神々) と人間たちとのつながりについて」(‘de coniunctione deorum (dei) et hominum’) 用いられた例として挙げられている (p. 1350, 64-65)。
- 15) *cum* が神に寄り添われた人間について用いられた同様の例は、ウルガータの以下の 2 箇所にも見られる—— PsGall 72:23: *ut iumentum factus sum apud te et ego semper tecum* (私はあなたの傍らで駄獣となったが、私は常にあなたと共に。[あなたは我が右手を取り、あなたの意思において私を導き、栄光と共に私を受け入れた])、PsGall 138:18: *dinumerabo eos et super harenam multiplicabuntur exsurrexi et adhuc sum tecum* ([神よ、あなたの友人たちは私のために大いに尊ばれ、彼らの優位は大いに強められた。] 私が彼らを数えると、彼らは砂よりも多くなるであろう。私が起き上がると、私はまだあなたと共にいる)。(14) およびこれら 2 箇所は J. Ecker, *Porta Sion: Lexikon zum lateinischen Psalter* (Trier, 1903), s.v. *cum* II.11 の「…のそばで、すぐ近くで (一緒に)」(‘bei, in nächster Nähe (und Gemeinschaft)’) に、(*cum* がギリシャ語原

- 典の μετά (…と共に)、ヘブライ語原典の וְיָ (…と共に) に対応すると指摘された) (5)(6) に続いて挙げられており、上記の PsGall 72:23 と 138:18 については「また精神・思考において」(‘auch im Geiste, mit dem Gedanken’) と記されている。
- 16) (15) は TLL, 1. cum IA4 において (13) よりあとに挙げられている (p. 1350, 75–76)。
- 17) TLL, s.v. 1. cum IV [vol. 4, p. 1369, 82–83].
- 18) 今義博他訳『詩編注解 (1)』アウグスティヌス著作集18/I (教文館、1997) 160頁。
- 19) TLL, s.v. laetifico IA1cα [vol. 7, pt. 2, p. 874, 8–9].
- 20) TLL, s.v. habito IIA1cβ [vol. 6, pt. 3, p. 2476, 37].
- 21) E. Dekkers et I. Fraipont, *Sancti Aurelii Augustini Enarrationes in Psalmos CI–CL*, CCSL 40 (Turnholti, 1956), p. 2025.
- 22) M. Adriaen, *Magni Aurelii Cassiodori Expositio Psalmorum I–LXX*, CCSL 97 (Turnholti, 1958), pp. 141–42. さらに以下の2つの詩篇解釈(前者は Augustinus による詩篇 15:10 についてのもの、後者は Cassiodorus による詩篇 139:14 についてのもの)にも、神の顔が恩恵をもたらすという考え方が認められる——「……『あなたは、あなたの顔と共に [ある] 私を喜びで満たすであろう』。彼らが面と向かってあなたを見る時、他に何も求めることがないように、あなたは彼らを喜びで満たすであろう。……」(‘… Adimplebis me laetitia cum uultu tuo. Adimplebis eos laetitia, ut non ultra quaerant aliquid, cum facie ad faciem te uiderint; …’) (E. Dekkers et I. Fraipont, *Sancti Aurelii Augustini Enarrationes in Psalmos I–L*, CCSL 38 (Turnholti, 1956), p. 91))、「……何故なら何が続くか見よ：直き者たちは彼の「顔と共に住まう」のをやめないのである。かの顔は、あらゆる報いの賜物であり、それを目にするに値する者には、いかなる恩恵も欠け得ないからである。……」(‘… Nam uide quid sequitur, quia cum uultu eius non desinunt habitare, qui recti sunt. … Ille enim uultus praemiorum omnium munus est, nec potest esse cuiusquam bonitatis indigus, qui illum meruerit habere conspectum. …’) (M. Adriaen, *Magni Aurelii Cassiodori Expositio Psalmorum LXXI–CL*, CCSL 98 (Turnholti, 1958), p. 1260))。
- 23) J. Niglutsch, *Brevis Explicatio Psalmorum*, ed. quinta (Bauzani, 1923), p. 65. なお以下の V. Thalhoffer (*Erklärung der Psalmen*, 9. Aufl. hrsg. von F. Wutz (Regensburg, 1923), S. 151, Anm. 3) による詩篇 20:7 の解釈にも、同様の「あなたの恵みの顔」(dein Gnadenantlitz) という言い方が見られる——「あなたは地上で王を、(与えられた助けにおいて) あなたの恵みの顔を(彼から逸らさず) 彼に照らさせることで、喜ばせ、彼および彼の子孫を、そこからメシアを生じさせるほどに、大きなものとする」(‘du erfreust den König hienieden

- daduruch, daß du (in der gewährten Hilfe) dein Gnadenantlitz über ihm leuchten lässest (nicht von ihm abwendest), daß du so Großes an ihm und seinem Samen tust, den Messias von ihm abstammen lässest’).
- 24) A. Rahlfs, *Septuaginta*, ed. altera (Stuttgart, 2006). ギリシャ語のテキストの略記と引用の仕方は、原則として、LSJ (H. G. Liddell and R. Scott, *A Greek-English Lexicon*, rev. by H. S. Jones, with a revised supplement (Oxford, 1996)) による。
- 25) F. Brown, S. R. Driver, and C. A. Briggs, *A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament* (Oxford), s.v. פָּנִי II.2.a.
- 26) F. Zorell, *Lexicon Hebraicum Veteris Testamenti* (Roma, 1989), s.v. פָּנִי V2A.
- 27) C. L. W. Grimm, *Lexicon Graeco-Latinum in Libros Novi Testamenti*, ed. quarta (Lipsiae, 1903), s.v. μετά I2bβ では「[εἶναι μετά τινος (ある人と共にある) という] 表現は比喩的に、ある人を導き助けるはずの神について言われる」(‘trop. phrasis dic. de deo, qui alicui adsit dux et auxiliator’) と述べられ、使徒行伝14:27——ὁσα ἐποίησεν ὁ θεὸς μετ’ αὐτῶν (神が彼らと共になしたすべてのこと)——が「すなわちその神性と援助と共に彼らと共にあって」(‘sc. ὦν, numine suo et auxilio ipsis praesens’) という解釈と共に例示され、続いて「逆に」(‘et vice versa’) と記して——つまり神が人と共にではなく、人が神と共にある——使徒行伝2:28が「すなわちあなたの面前にいる [私を]」(‘sc. ὄντα, i.e. tuae faciei praesentem’) という解釈と共に引用されている。
- 28) F. Zorell, *Lexicon Graecum Novi Testamenti*, ed. quinta (Roma, 1999), s.v. μετά I3d では、使徒行伝2:28の μετά τοῦ προσώπου τινός (ある人の顔と共に) に「= אִתּוֹ = ある人のそばで (ヘブライ語法)」(‘= אִתּוֹ = apud alqm. (hebraismus)’) と付記されている。
- 29) W. Bauer, *Griechisch-deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der frühchristlichen Literatur*, 6. Aufl. hrsg. v. K. Aland u. B. Aland (Berlin, 1988), s.v. μετά A.II.1.c の「特に εἶναι μ. τινος 『ある人と共にある』」(‘bes. εἶναι μ. τινος mit jmdm. zusammensein’) の γ においては、「特に手紙の結びで好まれ」(‘bes. beliebt in den Briefschlüssen’) 用いられた例がコリント後書13:11——ὁ θεὸς τῆς ἀγάπης καὶ εἰρήνης ἔσται μ. ὑμῶν (愛と平和の神があなたたちと共にいるであろう)——を始めとして挙げられており、その末尾に使徒行伝2:28では「אִתּוֹ は LXX により直訳されており、それは『あなたのそばで』を意味する」(‘ist v. d. LXX ἡ אִתּוֹ wörtl. übers. worden; es bed. bei dir’) と記されている。
- 30) T. Muraoka, *A Greek-English Lexicon of the Septuagint* (Louvain, 2009), s.v. μετά I.1 の「(仲間、連れ、助けなどとしてある人) と一緒に」(‘in company of sbd as associate, companion, helper etc.’) において、(16) の μετά τοῦ προσώπου

- σούには「あなた自身の面前で」(‘in your personal presence’) という意味が、また s.v. πρόσωπον 6.i において (18) の σύν τῷ προσώπῳ τινός (ある人の顔と共に) には「…のすぐ近くで」(‘in the close proximity of ..’) という意味が与えられている。
- 31) LXX と新約聖書ギリシャ語原典の語句の検索には、それぞれ E. Hatch and H. A. Redpath, *A Concordance to the Septuagint*, 2nd ed. (Grand Rapids, 1998) と *Concordance to the Novum Testamentum Graece of Nestle-Aland, 26th Edition*, . . . ed. by Institute for New Testament Textual Research . . . 3rd ed. (Berlin, 1987) を使用した。
- 32) J.-P. Migne, ‘Euthymii Commentarius in Psalmos Davidis’, *Euthymii Zigabeni Opera Quae Reperiri Potuerunt Omnia*, t. primus, PG (Patrologia Graeca) 128 (1864), col. 204B.
- 33) *Homeric Hymns, Homeric Apocrypha, Lives of Homer*, ed. and trans. by M. L. West, LCL 496 (2003), p. 202. (20) の μετ’ Ἀθηναίης は、LSJ, s.v. μετά A.II の「共同で、…と一緒に、…の助けで (σύν より密接な結合を表す)」(‘in common, along with, by aid of (implying a closer union than σύν)’) において引用され、「アテーナー『と共に』、すなわちアテーナー『の助けで』」(‘with, i.e. by aid of, Athena’) と付記されている。
- 34) μετά が神に支援された人間について用いられた同様の例は、LXX の以下の箇所にも見られる—— Lxx Ps.138(139):18: ἐξαριθμησομαι αὐτούς, καὶ ὑπὲρ ἄμμον πληθυνθήσονται· ἐξηγέρθην καὶ ἔτι εἰμὶ μετὰ σοῦ (〔神よ、あなたの友人たちは私のために大いに尊ばれ、彼らの支配は大いに強められた。〕私が彼らを数え、と、彼らは砂よりも多くなるであろう。私が目を覚ますと、私はまだあなたと共に。)(21) およびこの箇所の μετά はヘブライ語原文の ׀ (…と共に) に対応するが、これらの箇所のヘブライ語原典における対応箇所である詩編 73:23 と 139:18 は、BDB, s.v. ׀ 4.b の「= (知識にせよ記憶にせよ目的にせよ、ある人の) 意識 (において)」(‘=in one’s consciousness, whether of knowledge or memory or purpose’) に挙げられ、「= あなたの思考と配慮において」(‘=in thy thought and care’) と付記されている。
- 35) Migne, PG 128, col. 1268B–C.
- 36) *Homer: Iliad, Books 1–12*, with an English trans. by W. F. Wyatt, 2nd ed., LCL 170 (1999), p. 398. (23) は LSJ, s.v. σύν A.2 の「援助の付随的観念と共に、σ. θεῶν 神の『助け』ないしは『恵みで』、神が望むように」(‘with collat. notion of help or aid, σ. θεῶν with God’s help or blessing, as God wills’) に挙げられている例である。
- 37) Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece*, 28. revidierte Aufl. (Stuttgart, 2015). (24) は Bauer, s.v. σύν 1.c の「εἶναι σύν τινι (ある人と共にある) では共存が

- 注視されているか(……)、人の随伴に強調がある」(‘Bei εἶναι σὺν τινι ist das Zusammensein ins Auge gefaßt . . . oder der Ton liegt mehr auf dem Begleiten einer Pers.’) に挙げられている例である。
- 38) R. Devreesse, *Le Commentaire de Théodore de Mopsueste sur les Psaumes (I–LXXX)*, Studi e Testi 93 (Città del Vaticano, 1939), p. 99.
- 39) J.-P. Migne, ‘Interpretatio in Psalmo’, *Theodoret, Cyrensis Episcopi, Opera Omnia*, ed. J. L. Schulze, PG 80 (Paris, 1860; repr. Turnhout, 1977), col. 1004D–05A.
- 40) ちなみに C. G. Bretschneider, *Lexicon Manuale Graeco-Latinum in Libros Novi Testamenti*, ed. tertia (Lipsiae, 1840), s.v. πρόσωπον 1では、使徒行伝2:28の μετὰ [τοῦ] προσώπου σου に「すなわち慈愛に満ちた顔で私を見つつ」(‘i.e. vultu gratia pleno me intuens’) の解釈が与えられている。
- 41) D. Yerkes, *The Old English Life of Machutus* (Toronto, 1984), p. 77. (38) と次の (39) は DOE, s.v. *ansyn*¹ 2.a.i で「(ある人の) 前で」(‘before or in (someone’s) presence’) の意味の *fore / beforan ... ansyne* の例として挙げられている。
- 42) W. W. Skeat, *The Gospel according to Saint Luke and according to Saint John* (Cambridge, 1874, 1878; Nachdr. Darmstadt, 1970).
- 43) 残りの 3 例の *beforan ... ansyne* が何に由来するかを示すと、(30)(31) のそれはそれぞれ以下の *a facie ...* (…の面前(顔)から)——PsRom 9:4: *in conuertendo inimicum meum retrorsum infirmabuntur et peribunt a facie tua* (我が敵を後退させると、[彼らは] 衰え、あなたの面前から滅びるであろう)、PsRom 17:9: *ascendit fumus in ira eius et ignis a facie eius exardescit carbones succensi sunt ab eo* (彼の怒りで煙が昇り、彼の顔から火が燃え出、それにより炭が熾された)、(29) のそれは以下の *ante facie ...* (…の面前に)——PsRom 41:3: *sitiuit anima mea ad Deum uiuum quando ueniam et parebo ante faciem Dei* (我が魂は生きている神に渴いた。いつ私は行って、神の面前に現れるのであろうか) に由来する。
- 44) Cicero: *The Verrine Orations*, vol. 2, with an English trans. by L. H. G. Greenwood, rev., LCL 293 (1953), p. 470. (50) は TLL, s.v. *conspetus* IA2b において、前置詞が *conspetus* の奪格を伴う例の中に挙げられている (vol. 4, p. 492, 4–5)。

On the Old English Equivalent of *cum vultu tuo* in Ps 15:10

Satoru ISHIHARA

The *cum vultu tuo* ‘with thy face’ in *adimplebis me laetitia cum uultu tuo* (PsRom 15:10) ‘thou shalt fill me with joy with thy face’ is rendered by *beforan þinre ansyne* ‘before thy face’: *and gefylst me mid gefean beforan þinre ansyne* (PPs (prose) 15.11) ‘and fillest me with joy before thy face’.

The phrase *cum vultu* ... occurs twice, except in Ps 15:10, in the Vulgate, i.e. in Ps 20:7: *laetificabis eum in gaudio cum vultu tuo* ‘thou shalt cheer him in gladness with thy face’ and in Ps 139:14: *habitabunt recti cum uultu tuo* ‘the upright shall dwell with thy face’. The preposition *cum* can be used of the favourable position of someone accompanied by God (or gods), e.g. *certe sit nihil bonum aliud potius, si quidem vel di ipsi vel cum dis futuri sumus* (CIC. Tusc. 1, 76) ‘certainly no other good could be better, if indeed we ourselves are to be gods or with gods’. And in the 3 verses, as Augustine states on Ps. 139:14: *ueniet illis facies tua abundans sufficientia* ‘thy face, which aboundeth in sufficiency, shall come to them’, God’s face can be regarded as benevolent. It is to be said, therefore, that the *cum vultu tuo* is used of someone being favourably accompanied by God.

On the other hand, the phrase *beforan / for ... ansyne* used of God occurs 13 times, except in 15.11, in PPs (prose), and in 8 of the 13 examples God is not a benefactor of anyone / anything in front of him, e.g. *and forwurdon beforan ðinre ansyne* (PPs (prose) 9.3) ‘and [my enemies] perished before thy face’. Moreover, *beforan ... ansyne* can be used where someone / something receives no benefit from anyone looking at him / it, e.g. *& beforan his ansene . . . & fela unweorhlicra þinga wæs donde* (LS 13 (Machutus) 16r.7) ‘and in his [the saint’s] presence [the devil-possessed boy] . . . and was doing many disgraceful things’.

Thus we can conclude that the *beforan þinre ansyne* in PPs (prose) 15.11 fails to render the *cum vultu tuo* fully in that the latter is used of someone being benignly attended by God while *beforan ... ansyne* can be used where someone receives no favours from anyone in front of him.